

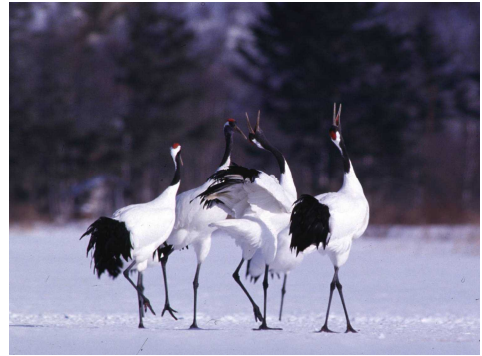
タンチョウの概要

1. 分類

ツル目ツル科 タンチョウ

(学名 *Grus japonensis*)

絶滅危惧Ⅱ類 (環境省レッドリスト 2020)



2. 形態的特徴及び生物学的特性

日本で繁殖する唯一の野生ツル。

全長 140cm、翼開長 240cm に達する日本最大級の鳥類。

夏期は湿原に分散して営巣・育雛を行い、冬は里近くへ移動し群れで生活をする。

3. 分布状況

国内では、北海道東部の湿原を中心に分布している。宗谷、十勝、日高、胆振地域などに繁殖分布が拡大する一方で、越冬期はほとんどの個体が釧路地域に集中分布する。

4. 現在の生息個体数

約 1,800 羽 (令和元年度、NPO の調査による)。

世界の総個体数は約 3,430 羽とされ (Momose and Momose, 2019)、種の約半数が北海道東部を中心に生息。

5. 生息を脅かす要因

- ・ 生息地である湿原の消失。
- ・ 電線衝突や交通事故に加え、農薬による中毒やスラリータンク (牛の糞尿溜) への落下事故などが新たな脅威となっている。
- ・ 越冬期になると釧路管内の給餌場に 9 割以上の個体が集中することから、鳥インフルエンザなどの感染症も強く懸念されている。

6. 保護増殖事業の概要及びその効果

- ・ 昭和 27 年、阿寒町及び鶴居村にて給餌に成功。以降、地元で冬季給餌を継続中。
- ・ 昭和 59 年、環境庁が給餌などの保護事業を開始。
- ・ 平成 5 年、国内希少野生動植物種に指定。同年保護増殖事業計画 (農林水産省、国土交通省、環境省) 策定。
- ・ 越冬地における一斉調査で確認された個体数は、保護増殖事業計画策定の平成 5 年には 628 羽であったが、令和元年度の調査では 1,370 羽を確認するなど、回復傾向にあるとみられる (図 1 参照)。
- ・ タンチョウが自然状態で安定的に存在できるような状態になることを最終的に目指

しながら、まずは道内において生息分散が確実に進むことを目標に、平成25年に「タンチョウ生息地分散行動計画」を策定。

- ・タンチョウの生息地分散に向けて、平成27年度から分散状況を確認しつつ給餌量調整を実施。環境省で給餌事業を行っている3箇所（鶴見台給餌場、鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ給餌場、阿寒給餌場）において、令和元年度には平成26年度比で5割まで最大給餌量を削減。令和2年度以降は、最大給餌量を前年度比1割減として給餌量調整を継続実施。
- ・給餌量調整を実施するにあたり、既存の取組と連携しながら越冬地分散の進捗の確認調査や道央方面における分散適地等の生息地分散にかかる諸条件について調査等を実施。
- ・また、農業被害の拡大の懸念があることから、タンチョウ保護行政と鳥獣被害防止行政との連携による対策の強化を検討。
- ・傷病個体（死体を含む）を保護・回収し、原因究明を行い、対策に活用（図2、3）。
- ・令和2年度に「タンチョウ生息地分散行動計画（平成25年策定）」のレビューを実施。レビュー結果をふまえ、令和3年度より「タンチョウ生息地分散行動計画」の改定作業を実施。

7. 他法令等による保護の状況

国の特別天然記念物

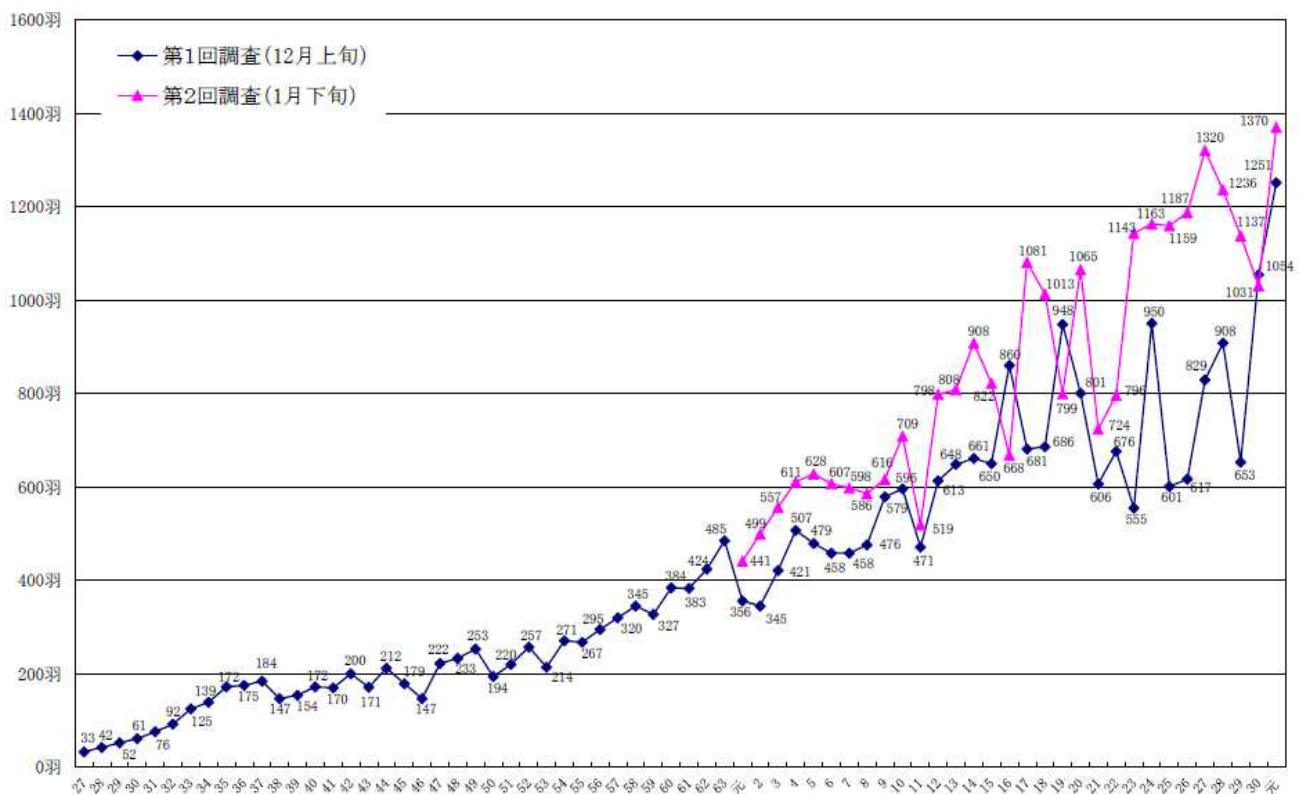


図1 タンチョウ一斉カウント調査の結果の推移

(平成24年度より越冬分布調査として名称及び調査方法の一部を変更)

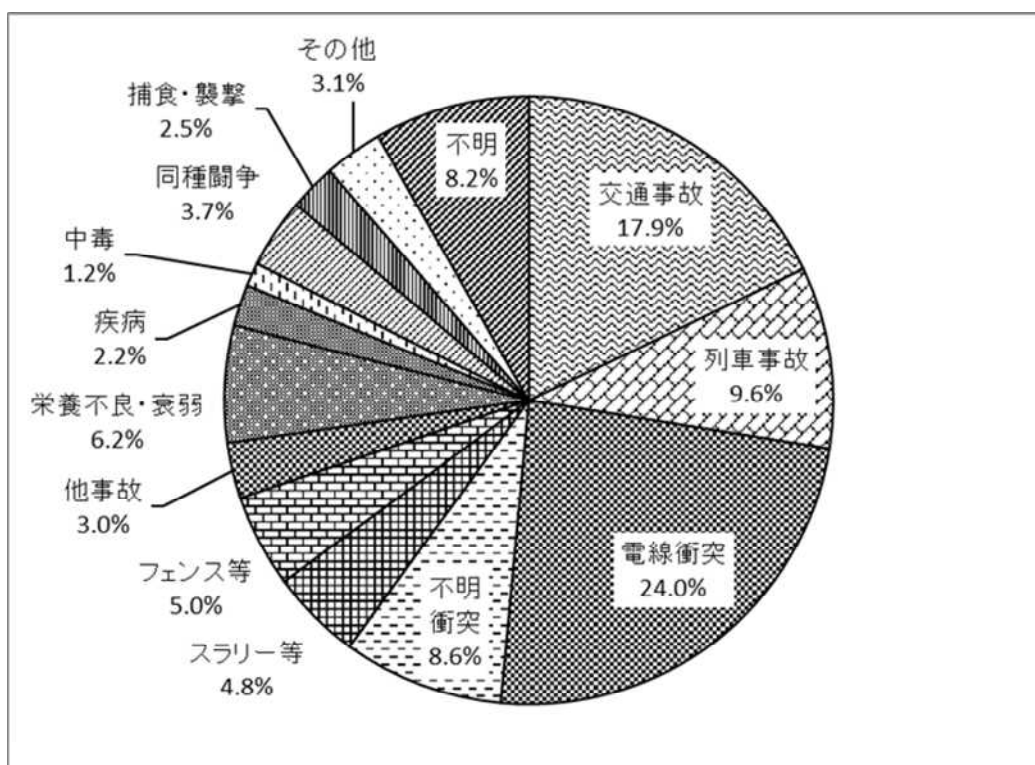


図2 タンチョウ收容原因割合 (H12-R 元年度)

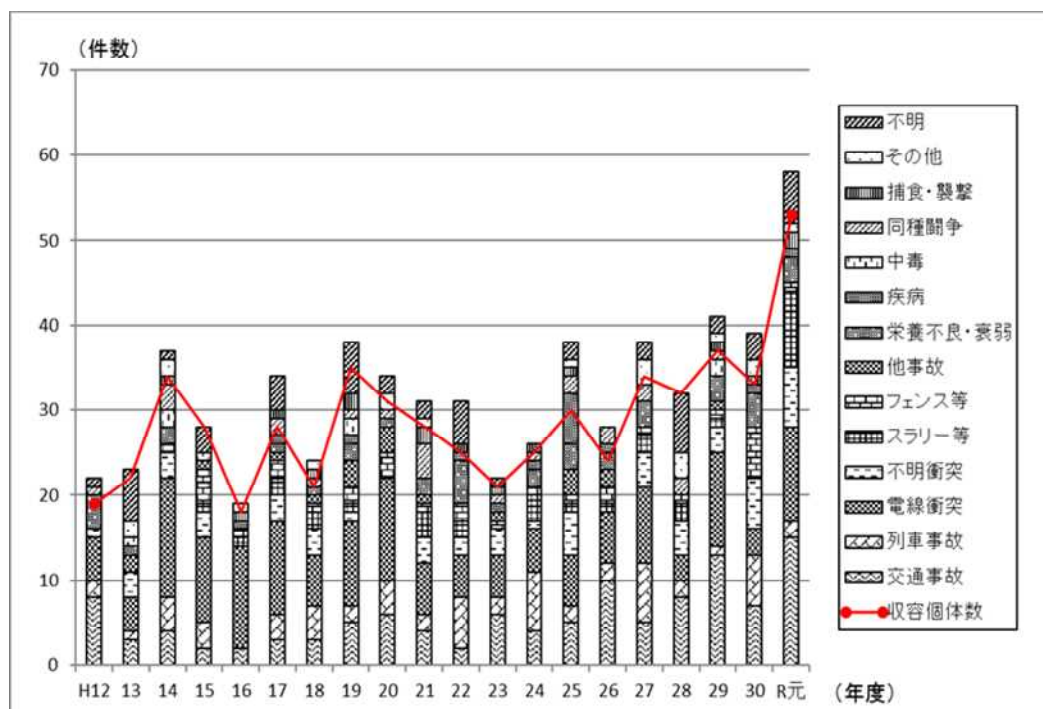


図3 タンチョウ年度別收容件数 (H12-R 元年度)